



MIYAGI CHILDREN'S HOSPITAL
宮城県立こども病院

発行：地方独立行政法人 宮城県立こども病院

院内学術交流会—驚きの“灯台下暗し”—

院長 今泉 益栄



こども病院の院内学術交流会は2016年6月に始まり、昨年12月に第3回が開催されました。16診療科と主な部署（看護部、薬剤部、放射線部、検査部、栄養管理部、成育支援局）が持ち回りで行う職員対象の学術発表会で、年4回程、定期開催します。各開催は平日夕方の1時間半で、部署代表6人がプレゼンテーション（発表10分、質疑5分）し、過去の学会発表や部署アピールも可です。

当初これを企画するに当たり、参加者が集まるか不安がありました。しかし、いざ蓋を開けてみると第1～3回の参加人数は86名→88名→90名と予想を超えるものでした。医師・看護師だけでなくコメディカルや事務職員など広く職種を越えて多くの職員が関心を持ってくれました。

振り返れば、大きな関心を集める兆しは幾つかありました。一つは、当院の地域医療連携の会「七夕の集い」の診療科プレゼンテーションを聴いた職員が「普段顔を合わせている先生があんな仕事をしていると知り、まるで目から鱗が落ちる様でした」と感想を述べる仕事環境。二つは、直前の2016年3月に拓桃医療療育センターが秋保から移転統合し、相手が何をやっているか職員が懐いた関心事。

診療科に加えて主な部署が参加したことで、プレゼンテーション内容は実に多彩となりました。第2回では、MRI撮影時の騒音低減の研究（放射線部）、第3回では、栄養管理を通して入院患者を支援する管理栄養士の取組み（栄養管理部）が印象的でした。また、発達診療科の患者の親御さんへのアプローチ研究が見せてくれた親子の深層心理には驚きました。

この交流会は、普段近いが故に見えにくい他職種の仕事ぶりや発表者の人間性が現れるパフォーマンスの場となり、「灯台下暗し」を実感できる人気イベントに成長しつつあります。

病院理念

- ・私たちは、こどもの権利を尊重し、こどもの成長を育む心の通った医療・療育を行います。
- ・私たちは、高度で専門的な知識と技術に支えられた、良質で安全な医療・療育を行います。

基本方針

1. チーム医療・成育医療及び総合的な療育プログラムを実践し、温かい医療・療育を行います。
2. こどもの成長・発達に応じたきめ細やかな医療・療育を行い、自立の心を育みます。
3. 一人ひとりの成長・発達に寄り添い、安全で潤いのある療養・療育環境を整えます。
4. 小児医療と療育の中核施設として、地域の関係機関と連携し、患者や家族の地域での生活を支えます。
5. こどもや家族と診療・療育内容の情報を共有し、情報公開に努めます。
6. 自己評価を行い、外部評価を尊重するとともに、業務の改善や効率化を図り、健全経営に努めます。
7. 臨床研究及び人材の育成を推進し、医療・療育水準の向上に貢献します。
8. 職員の就労環境を整備するとともに、職員の知識・技術の習得を支援します。

Contents

各診療科アピールポイント	2
部門紹介	3
臨床研究推進室の紹介	3
地域医療連携室だより	4
拓桃園紹介	5
ボランティア紹介	6
行事予定	6
編集後記	6





各診療科アピールポイント



アレルギー科

アレルギー科科长 三浦 克志

アレルギー科は2015年4月に総合診療科内の4つの専門診療科の中の1つとして誕生しました。当院は小児専門病院ではありますが、宮城県唯一のアレルギー科を標榜する総合病院となりました。また、宮城県唯一の日本アレルギー学会認定アレルギー専門医（小児科）正教育研修施設、さらに、日本小児臨床アレルギー学会認定教育研修施設でもあり、アレルギー疾患の患者さんに高水準の治療を行う事を最優先とし、アレルギー専門医と専門メディカル・スタッフ育成にも取り組んでいます。

対象疾患としては、気管支喘息、アトピー性皮膚炎、食物アレルギー、アナフィラキシー（食物依存性運動誘発性アナフィラキシーを含む）、アレルギー性鼻炎・副鼻腔炎、アレルギー性結膜炎、蕁麻疹、金属や薬物アレルギーなどのアレルギー疾患全般をガイドラインに準じた標準治療と全国の小児専門医療施設と共同した先進治療を行っています。さらに、当科の診療の特徴としては、他科と多職種（小児アレルギーエドクターを中心とした）と連携して、きめ細かい診療をしていることです。

食物アレルギー患者に対しての食物負荷試験は積極的に行い、2016年度は延べ1,166例で行いました。食物負荷試験の結果で得た「安全に食べられる食品量」をもとに患者さんへの栄養指導を管理栄養士と共にしています。さらに、経口免疫療法（経口減感作療法）にも取り組んでいます。経口免疫療法は未だ確立された治療法ではありませんが、今までアナフィラキシー等の症状のため、食物除去を余儀なくされていた患者が少しずつ増量して食べられるようになってきています。約300例が治療中ではありますが、中には寛解し自由摂取が可能になった患者さんもあります。アナフィラキシーを起こす可能性のある患者さんに対しては予防法、アドレナリン自己注射（エピペン®）を含めた緊急時の対処法や栄養不良にならないように必要最小

限の除去食となるような指導を行なっています。

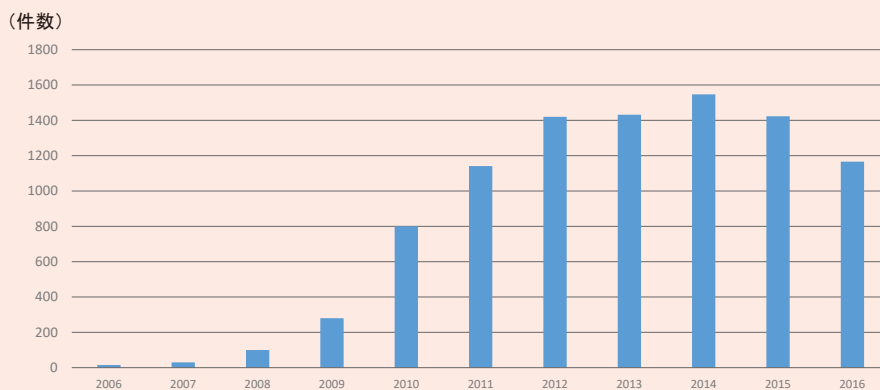
気管支喘息やアトピー性皮膚炎患者に対しては急性期の治療だけでなく、コントロール目的にプログラムを作成して教育入院も行っています。2016年度はアトピー性皮膚炎の入院は38名でした。気管支喘息に対しては、発達診療科と連携して発作時の呼吸理学療法を、また心理的要因の強い症例には児童精神科や臨床心理士と連携して心理的ケアを行っています。さらに、適応を考えて、生物学的製剤の抗IgE抗体（オマリズマブ：ゾレア®）や抗IL-5抗体（メポリズマブ：ヌーカラ®）にて重症気管支喘息への治療を行っています。

アレルギーで予防接種が困難と思われる患者への予防接種も積極的に行っていますし、薬物（局所麻酔薬を含む）アレルギー患者への検査も行っています。

以上、簡単ではありますが、アレルギー科の診療案内をさせていただきました。アレルギー疾患でお困りの患者さんがいましたらご遠慮なさらず、ご紹介いただけましたら幸いです。



第33回日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会終了時の記念撮影
2016年7月16-17日に三浦克志が会長で、学会を主催いたしました。全国から約1,000人の医療関係者に参加していただきました。当科、当院のメディカル・スタッフだけでなく当院の関係者の協力により無事終えることが出来ました。



図：食物負荷試験の年度推移

部門紹介

MFICU・産科病棟



MFICU・産科病棟看護師長 日戸 千恵

当院産科は、宮城県内外から切迫早産や胎児疾患、胎児治療が必要な妊婦を受け入れています。また、新生児搬送となった母親の産褥入院も対応しています。病床数は、MFICU（母体胎児集中治療室）6床・産科病棟12床の計18床で、同じフロアに病棟と産科外来が隣接しています。同じスタッフ（医師5名、助産師20名、看護師7名、看護助手、クラーク）で妊娠から産後までの継続サポートをしています。業務内容は、妊娠・産褥各期の保健指導、母乳育児支援、分娩介助、新生児ケアなどで、グリーフケアも大切なケアとして行っております。患者の一番身近な存在として、患者とその家族の思いを受け止め、認定遺伝カウンセラーや臨床心理士、医療ソーシャルワーカーと連携をとりながら意思決定を支えるケアを心がけています。産科医療機関の皆様はじめ関連診療科や各部署の方々と連携を図りながら、今後も安心して妊娠・出産・育児ができる環境作りを目指していきます。



後列 左から日戸師長、永岡医師、利光医長、室月科長、小堀医師、齋藤医師とスタッフの皆さん

臨床研究推進室の紹介



臨床研究推進室長 虻川 大樹

近年、医療分野における新たな医薬品および医療技術の開発は益々重要となっています。高度で専門的な小児医療を担う当院にとって、難治性疾患の治療開発に不可欠な臨床研究は社会的使命であり、実際に治験および臨床研究の件数が年々増加しています。そこで、当院における臨床研究の基盤整備と支援体制の充実を図り、適切で質の高い臨床研究を実施していくために、従来の倫理委員会ならびに治験審査委員会の事務局を発展させる形で、臨床研究推進室が平成29年12月に新設されました。室員は医師、薬剤師、看護師、臨床検査技師、事務員、研究補助員で構成され、医薬品・医療機器に関する治験（企業主導型、医師主導型）を含めた臨床研究全般についての学術的・事務的サポート、ならびに臨床研究を支援する人材の確保・養成を行ってまいります。まだ産まれたばかりですが、山積する課題に少しずつ取り組んでまいりますので、どうぞよろしくお願いいたします。



後列、左から中井室長代理、小澤室員、北村室員、吉岡室員
前列、左から津田室員、虻川室長、佐藤副室長、二木副室長



地域医療連携室だより



● 地域医療研修会のご案内 ●

臨床研究倫理に関する研修会

平成 30 年 3 月 19 日（月） 18:00～19:00 宮城県立こども病院 本館 1 階 愛子ホール
演 題 「治験および臨床研究を行うために知っておくべきこと」
講 師 東北大学病院 臨床研究推進センター 特任教授 高野 忠夫 先生
標記の研修会以外にも、臨床放射線病理カンファランス、臨床遺伝カンファランス等の開催を予定しております。詳細が決まり次第、当院ホームページ <http://www.miyagi-children.or.jp/> に掲載しますとともに、メールアドレス登録済みの先生方へ電子メールでご案内いたします。

短期入所サービスについて

当院に併設している医療型障害児入所施設「拓桃園」では短期入所サービスが利用できます。
冠婚葬祭以外にも介護者の休息やこどもの行事への参加などの目的で、現在年間約 160 名の方々にご利用いただいています。
定期的な利用以外に介護者や家族の体調不良時などの急な利用も含め、利用しやすい環境の整備に取り組んでいます。利用方法については地域医療連携室へお問い合わせください。

対象

- 肢体不自由児・重症心身障害児の方が対象です。
- ＊自閉症や重度の知的障害の方は病棟の特性上受け入れが困難であるため、対象となる施設への申込をお願いいたします。
- ＊ご利用の際には市町村が発行する「障害福祉サービス受給者証」が必要です。

サービス内容

- 在宅の重症心身障害児の保護者（児童福祉法（昭和 22 年法律第 164 号）第 6 条に規定する保護者。以下「保護者」という）が、様々な理由で障害児本人を介護することが一時的に困難になった場合に利用できます。
内容：食事・排泄・入浴（入浴日が該当する日）などの日常生活上の世話、健康チェック・経管栄養や導尿等の医療ケア
- ＊医療行為・リハビリテーションは含まれません。
 - ＊利用期間中に医療を必要とする場合は、保険診療に切り替えて医療行為を行うことになります。また、その際には速やかに保護者に連絡させていただきます。

利用申し込み

地域医療連携室にご相談ください。

問合せ → 体験入院（一泊程度） → 申し込み → 利用開始

宮城県立こども病院 地域医療連携室 室長 虻川 大樹

〒989-3126 仙台市青葉区落合四丁目3番17号

開室時間 月曜日～金曜日（祝日、年末年始は除く）8:30～17:00

TEL: 022-391-5115（直通） FAX: 022-391-5120（直通）

E-mail: tiiki@miyagi-children.or.jp

拓桃園紹介



拓桃館 2 階病棟

～こども達とご家族の生活を支援すること～

拓桃館 2 階病棟 看護師長 大石 愛

拓桃館 2 階病棟は病床数 27 床で、4 床部屋が 3 室、2 床部屋が 2 室、個室が 11 室あり、個室のうち 5 室が畳の部屋になっています。拓桃館は病院と医療型障害児入所施設の 2 つの機能を持ち、治療と福祉の両面からこども達をサポートしています。拓桃館 2 階病棟の主な役割として、神経科・整形外科の検査や治療、在宅調整のための短期間の入院、リハビリテーション目的（術後・親子入院・在宅調整）の契約入所（おおむね 1 か月以上）、また福祉としてショートステイ（18 歳以下）を受け入れています。

医療的ケアが多いこども達の退院支援では、安全なケアの手技の指導、治療やリハビリテーションのサポート、学校や地域とのかかわりなど、多職種との連携を図りながら、ご家族と一緒に考え、実践しています。また医療ケアが多いこども達の入院が多い中、整形外科の術後リハビリテーション期の中学生・高校生がいるときにはナースステーション前の食堂も違った賑わいを見せたりしています。

拓桃館 2 階病棟の特徴的な入院のプログラムに親子入院があります。障害のあるこども達を在宅で（地域で）育てていくために、家族の方に発達を促す関わり方を覚えてもらい、また生活を整えることやお母さん同士のつながり、家族のつながりから子育てを考えていく 2 ヶ月間です。わが子と向き合い、スタッフや他のお母さんとお話する中で、お母さん達の表情が変わり、こども達も少しずつ成長していく様子に関われることは、私達にとっても毎回素敵な出会いとなっています。

また福祉としてのショートステイ・体調管理入院も拓桃館 2 階病棟の大きな役割となっています。重度の障害があり多くの医療的ケアを必要としながら地域で生活しているお子さん、障害のあるお子さんと毎日向き合っている家族の方に寄り添い、拓桃館 2 階病棟を利用することで『少しほっとできる時間』のお手伝いとなればと、スタッフ一同（師長、主任看護師 2 名、看護師 21 名、看護助手 2 名）力を合わせて日々がんばっています。



前列 左から 4 人目大石師長とスタッフの皆さん



● ボランティア紹介 ●

広報委員会



武藤 雅代

広報委員会では年に2回、7月と12月に「ゆりかご通信」を発行しています。当時のボランティアコーディネーター星しげ子さんのお声掛けで2011年に発足し、現在は4名で活動しています。第1号を同年7月に発行し、先日第13号の印刷が完了しました。

週1回の編集会議では、まずメインテーマを決め、寄稿していただく方に依頼をします。お預かりした原稿は、全員で何度も読み返して校正し、配置や配色、写真について検討を重ねて約2ヶ月で完成させています。私にとって広報委員としての仕事は、自分の所属以外の方とのつながりが増えたり、普段の活動では気付かない発見があったりと、とても楽しい時間でした。

この7年間で一番心に残って

いることは、ボランティアゆりかご10周年の記念誌発刊に携わったことです。たくさんの方々の力をお借りして、約1年かけて完成させた記念誌を手にした時の喜びは、ひとしおでした。



左から、武藤 雅代、前田 純子、櫻井 光雄、伊藤 真弓
（「ゆりかご通信」広報委員の皆さん）

行事予定

- 2月 2日（金） 豆まき会
- 2月14日（水） クリニクラウン訪問（拓桃館）
- 2月19日（月） 第168回まほうの広場コンサート



編集後記

早いもので、この広報紙が届く頃には、すでに新年を迎えていると思います。1年間は365日、時間では8,760時間、分では52万5,600分です。「1分間」で出来る事をと考えてみると、身の回りのちょっとした片付け、肩回しや足上げ運動、家族や友人の良い所を褒める云々、いろいろ出てきます。

人それぞれ、その時々によって「1分間」「1時間」「1年間」の重みや感じ方が変わります。人生における人それぞれの「時間の物差し」とは、だいたいバラエティに富んでいるように感じています。となると、どんな物差しを使うかで、1日、1ヶ月、1年といずれは人生が変わってくるかもしれません。

年末年始の休暇で、普段の仕事をしている時間の流れとは違うものを感じる時こそ、1年間の過ごし方を改めて考えてみては如何でしょうか。

（臨床工学部 横山麻依子）

地方独立行政法人

宮城県立こども病院

〒989-3126

宮城県仙台市青葉区落合四丁目3-17

TEL: 022-391-5111

FAX: 022-391-5118

<http://www.miyagi-children.or.jp/>

広報委員会

委員長 田中 高志

広報委員 虻川 大樹

乾 健彦

小畑 正子

鈴木 敏也

洞口 亮

原山千穂子

町井 祐輔

横山麻依子

阿部 智

岩崎かおり

櫻井奈津子

武山 淳二

中村 一樹

藤本 尚子

三上 静香

猪狩 菜緒

大塚 有希

佐藤 慎

千葉 弥生

濱町友里恵

真嶋 智彦

皆川 寛恵



日本医療機能評価機構
認定第JC1934号
当院は日本医療機能評価
機構の認定病院です。



この印刷物はグリーン基準に適合した印刷資材を使用し、グリーンプリンティング認定工場が印刷した環境配慮商品です。用紙は責任をもって管理された森林から作られたFSC®認証紙を使用し、インキは環境にやさしい植物油インキを使用しています。